

『源氏物語』と和歌のことば

——桐壺更衣「いのちなりけり」の場合——

Genji-monogatari and expressions in "Waka" (thirty-one syllable poem)

— A case of *inochimarikeri* by *Kiritsubo-no-kōi* —

植田 恭代

UETA Yasuyo

要旨

『源氏物語』で桐壺更衣が詠む唯一の和歌は、「いのちなりけり」という詠嘆の表現で結ばれる。この和歌について、かつて論者はパターン化された詠みくちではないかという私見を述べたことがあり、本稿は短い旧稿での問題意識を発端としてこの末尾表現に着目し検討を試みるものである。あらためてこの部分を和歌表現の観点から検討してみると、これは定型にまでは至らないものの人口に膾炙し、同時代の語感も呼び込む表現である。物語は和歌の表現史のうえにあることばの力をとりこみ、さらに相反することばをもあわせて、桐壺更衣の和歌を詠出しているのである。

はじめに

『源氏物語』には全七百九十五首の和歌が詠まれている。これらの和歌は、物語世界の人々の個性を反映し、それぞれの物語場面に見合う。どの巻で誰がどのような和歌を詠んでいるのかはすでに整理され、作中人物別和歌の一覧資料としてみる¹⁾ことができ、物語最初の和歌は桐壺更衣の一首である。『源氏物語』冒頭の光源氏誕生に至る桐壺帝と更衣の悲恋は更衣の重篤を招き、その結果更衣は宮中を退出し息絶える。桐壺更衣唯一の詠歌はその生涯の終焉間際にあり、「いかまほしきはいのちなりけり」と結ばれる。この場面について、かつて論者は雑誌特集のなかの一分担として執筆を担当し、これがひとつのパターン化した表現をかりた詠みくちではないかと述べたことがある²⁾。物語和歌も和歌史と深く関わって詠出され、さらに和歌表現として検討することが必要である。

本稿では、旧稿における問題意識を端緒とする発展的課題から物語表現としての和歌をとりあげ、かつて企画の制約のなかで十分にふれ得なかつた和歌表現としての「いのちなりけり」という末尾表現に光をあて、あらためて検討を試みる。桐壺更衣の一首から、物語和歌に秘められた歌のことばの力を考えていくことをめざしている。

一、桐壺更衣の心情表現

まず、『源氏物語』桐壺巻の場面を確認することから始める。

場面の概要を記しておく、光源氏三歳の夏、桐壺帝の寵愛を一身に受けた更衣が病のため退出しようとするが帝は拒み、弱り切った娘を遣う母君の懇願によって、ようやく皇子を宮中に残したまま退出が叶う。物語では「忍びてぞ出でたまふ」とひとまず退出が示されたあとで、改めて更衣の退出までの経緯が語られる。死期迫る更衣とその現実に狼狽しながら、なお更衣を近くにとどめおこうとする帝の姿が、より身近にたどられていく場面となる。

輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「かざりとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり
いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむとおぼしめすに、「今日はじむべき祈禱ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

桐壺 二二―二三頁³⁾

この直後、一睡もできぬ帝のもとに更衣が亡くなったとの知らせが届き、掲出部分は臨終間際の更衣と帝を描く場面である、そこに更衣の詠歌がはさまれる。

かえりみれば、物語冒頭から桐壺更衣の心情は事細かに描かれてはならず、二人の悲恋の経緯は語り手によって極めて早くたどられるばかりであった。したがって、物語中この一首のみの更衣の詠歌とそれに続く「いとかく思ひたまへましかば」の一節が、更衣の心情のすべてを凝縮して表しているのである。

この部分の校訂のしかたには揺れがあり、「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを」を地の文とし語り手のことばと解釈する立場もあるが、「さりとも」以下が帝の言葉とする校訂は近年の諸注釈書でも一致をみる。

桐壺帝と更衣の悲恋の原因は、公の立場にある帝がその使命に反逆し、私情を貫く恋愛をしてしまったことにある。古代の帝王であれば、後宮の女性たちそれぞれに、身分相應の愛情を広くかけるべきであるはずなのに、女御より格の下がる更衣という身分の女性一人を溺愛したために、後宮の混乱を招くのである。物語本文は、周囲の嫉妬のさまを「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臍の更衣たちはまして安からず。」と説明する。我こそはと誇り高く思っていた人たちは更衣を見下し妬み、同等かそれ以下の身分の更衣たちは、いっそう穏やかではなかったというのが、この物語の説明である。親兄弟の勢力を頼めず身分に安住できない更衣たちにとって帝の愛情こそが唯一の頼みの綱であり、後宮の秩序を乱す更衣への寵愛は、女御たち以上に反感を招いてしまう。桐壺帝と更衣の恋愛は、朝廷の秩序を敵に回す危険な恋愛にほかならない。その

結末として更衣の死がある。直前の、退出を許さぬ帝と更衣の最後の対面を語る場面で、更衣はただ一度「女」と呼ばれ、恋の女性としてとらえられている。帝と更衣という身分の不均衡ゆえに悲恋とならざるをえなかった二人が、宮中にありながら私の色合いを強め、男女として強調される時に詠まれる更衣の和歌が「かぎりとて」の一首なのである。

更衣の詠歌に対する帝の直接の返歌はない。帝は悲しみのあまり返歌を詠めず、それが感乱ぶりを強調する。のちの帝の哀傷歌「たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」が遠く呼応しているとも言われるが、このくだりは一般的な唱和歌のあり方とは体裁を異にしている。しかし、更衣の歌は一見独詠のようでありながら、まったく孤立した独詠でもない。前にある桐壺帝のことばを受けとめて、更衣の歌は成り立っている。それが、「限りあらん道にもおくれ先立たじ」以下の部分なのである。帝のかつての約束である「限りあらん道」と、ここでの「行き」を受けて、更衣の歌の「かぎりとて」「道」が詠み込まれ、「いかまほしき」が導かれる。「いかまほしき」は「生かまほしき」と「行かまほしき」を掛けている。

ここでは、かねてからの約束を語る「限りあらむ道」それに続く「行き」という、目の前で発せられる帝のことばと更衣の歌が、明らかに呼応している。帝と更衣の恋愛の経緯を受けとめて、「かぎりとて」の歌が詠出されるのである。しかし、それは唱和の形式にはなりえず、もとより返歌も存在しない。帝の悲嘆と感乱のなかで、更衣の唯一の心情は歌

のことばとして物語世界に浮かびあがる。

二、更衣詠歌の発想

この場面の基底には、『長恨歌』が深く関わっている。それは、物語冒頭からの展開をたどりみても明らかであり、常軌を逸した帝の寵愛ぶりを描くくだりにも「楊貴妃のためしも引き出でつくくなりゆくに」(一八頁)と、楊貴妃が引き合いに出されていた。更衣亡きあとの哀傷場面には「明け暮れ御覧する長恨歌の御絵」(三三頁)とあり、悲嘆にくれる帝の「たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこ知るべく」の歌は「長恨歌」の道士を踏まえ、続く部分では楊貴妃と比較して更衣を「なつかしうらうたげなりしを思し出づる」(三五頁)と回想する。楊貴妃が重ねられる更衣の造型は、さらに『漢書』「外戚伝」や『白氏文集』「李夫人」、『瑠玉集』などによる李夫人とも関連があり、説話化された李夫人伝が日本にも享受されて「桐壺」巻にも影をおとしていることが指摘されている。⁵⁾ その設定や破格の寵愛、衰弱する我が身を悲しむ姿から死に至る展開の類似に加え、夫人の魂を呼び寄せる反魂香の故事とも通じている。また、迫害される女性のイメージとして「上陽白髮人」や『梅妃伝』との関わりも指摘される。⁶⁾ 一方、史上的人物については『河海抄』が『続日本後記』の仁明天皇女御藤原沢子をあげるが、さらに沢子の卒伝全体や『三代実録』の記事にまで広げて関わりをみる必要も説かれている。⁷⁾ また、願文に李夫人を介在させて検討することから、花山

院女御祇子を重ねる説もみられる。⁸⁾

公の立場にありながら体制に反する二人の悲恋や更衣という女性の造型は、漢籍に日本の史実にさまざまな抛り所をもち、伝説化された造型をも用いて一つの典型的な恋愛のあり方を描出している。しかし、類型に陥らず、これらのイメージを用いながら独自の場面をつくりあげていく『源氏物語』は、ここで更衣を「女」と語り、「かぎり」との詠歌をおくのである。

とりわけ着目されるのは、この一首の詠みくちである。更衣の内面は「いかまほしきはいのちなりけり」と表わされ、「なりけり」という詠嘆の末尾表現で命を強調するこの詠みくちこそ、この一首の要となつている。古注釈をみると、『弄花抄』は「此哥更衣の時にのそみて心中をありのま、によめり」とし、『岷江入楚』には「或抄御説云」として「生死のならひ力をよはねとも生きまほしきとねかひたる也」とある。「或抄」とは「長珊問書」、「御説」は三条西実条の講釈のこと、『弄花抄』が『細流抄』に受け継がれ『岷江入楚』じたい三条西家の説を中心に集大成した書である。その事情を考慮すれば、三条西家の解釈は更衣の生きたいという願いを積極的に汲み上げている。

前述のとおり『源氏物語』には七九五首の和歌があり、物語和歌については多くの研究が重ねられ、桐壺巻の和歌については物語全体にも関わるものが繰り返し指摘されている。和歌史の方からは、小町谷照彦氏によって場面に即した緻密な研究がなされている。⁹⁾ また、この更衣の和歌の特異性については益田勝実氏によって日常の藝のことばに対し晴れ

のことばで応じるくいちがいが指摘され、藤河家利昭氏は上の句と下の句に矛盾を孕みながら掛詞によって繋がるこの歌が、まず『古今集』離別の和歌に想を得て死別の状況そのものの逆転をはかっているとす¹¹。

『古今集』三三七番歌は遊女の歌である。

源のさねがつくしへゆあみむとてまかりけるに、山ざきにてわかれをしみける所にてよめる

いのちだに心になふ物ならばなにか別のかなしからまし

『古今集』卷八 離別 三三七 しろめ¹²

源実は宇多朝の人、筑紫へ湯浴みに出かけていった時の和歌で、『大和物語』一四五段にもある。『古今集』詞書では、山崎から淀川を下って行くときに遊女しろめが詠んだ和歌となっており、せめて命だけでも心のままになるのならば、といい、反実仮想の言い方で、そうはならない現実にあつて悲しい別れを詠んでいる。ままならぬ「いのち」をうたう『古今集』三三七番歌の発想は、この場面の状況と似通う。勅撰集入集歌のこうした発想も、物語場面の基盤のひとつにはあろう。藤河家氏は、さらに『伊勢物語』の方法の継承や長恨歌の詩句の影響を指摘されており、それぞれの影響関係は否めない。しかし、更衣の詠歌は「いかまほしきはいのちなりけり」と詠みあげるのであり、生きたいと強く願うこの詠みくちこそが、更衣の切実な心境を力強く訴えかけてくるのである。「いのちなりけり」という表現にこだわって、考察してみる必要がある。

三、「いのちなりけり」

「いのちなりけり」という和歌表現に即して考えてみたい。

「いのち」は、『万葉集』から詠まれていることばである。『万葉集』の表記としては「伊乃知」「伊能知」「命」「壽」などがあり、「いのち」を詠み込む歌は百五十五首にのぼる。その詠まれ方はさまざまで、「いのち」を受ける語は「をし」「ながく」をはじめ多岐にわたる。「たまきはる」「うつせみの」などの枕詞をともしなう場合もある。『万葉集』では歌のことばとして定型化しているわけではなく、寿命を表すことばとして制約を受けずに詠まれている。その一方で、『万葉集』にはこれほど多くの「いのち」を詠む歌がありながら、「いのちなりけり」という詠嘆の表現で結ぶ例はみられない。

和歌表現としての「いのちなりけり」が確認できる例は、管見に入っただけで『古今集』が早い。

題しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのちなりけり

『古今集』卷二 春下 九七 よみ人しらず

やまひにわづらひ侍りける秋、心地のたのもしげなくおほえければよみて人のもにつかはしける

もみじばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり

『古今集』卷十六 哀傷 八五九 大江千里

最初の勅撰和歌集に収められる二首に、末尾を「いのちなりけり」で結ぶ歌がある。九七番歌は盛りの花を再びみることを擬人化して「あひ見む」と表し、それが「いのちなりけり」と結ばれる。八五九番歌では、病んだ身で迎えた秋にはかないものが「いのちなりけり」と詠まれていく。九七番歌は、「題知らず」「よみ人しらず」と明記され、固有の作者名と切り離されて入集されている。勅撰集に「よみ人しらず」として入集される際の事情はさまざまであるにせよ、固有名詞から解き放たれておさめられた一首には伝承性がともなう。

この他、『古今集』には、係助詞「ぞ」をともない五句が「いのちなりける」となる強調表現で詠まれる例も見出せる。

今ははやこひしましをあひ見むとたのめしことぞいのちなりける

『古今集』卷十二 恋歌二 六一三 ふかやぶ

『古今六帖』第四 こひ 一九九四

これは恋の歌で、作者は清原深養父とある。この場合の「命なりける」は恋人の「あひ見む」すなわち、会いましょうという言葉をも頼みにしていたのだから、の意になる。

『古今集』に「いのち」が詠まれる歌は全十二例あり、係助詞をともなう変型も含めれば、そのうちの三首に「いのちなりけり」の詠みくちが

確認できる。決して用例数が多いわけではないものの、「いのちなりけり」という末尾表現は、『古今集』に入集することによって広く享受され、深養父の六一三番歌が『古今六帖』にもとられてさらに浸透の度合いを強め、ひとつの詠みくちとして人口に膾炙したことが考えられる。以後の用例は、私家集を中心に散見する。

また

さりとも頼むころにはかられてしなれぬものはいのちなりけり

『能宣集』三一九

『金葉集』三奏本 四六二 「題不知」 大中臣能宣

たれならむ、ふちの花をしまむといひしほどに、かくれにし人をこひて

惜しまむといひしはなだにちらぬまになくなりけるいのちなりけり

『安法法師集』四〇

能宣は、『後撰集』撰進に関わった梨壺の五人の一人である。『能宣集』に「うちの御歌合に」とあるなかの一首はのちの勅撰集にも入集しており、広く知られた歌であったことがうかがえる。さらに、女性歌人の歌にも「いのちなりけり」がある。

きみをのみこひつるあまのたまのをはさをにかかれる命なりけり

『賀茂保憲女集』一四三

見てだにもまどひし心わびぬればあはでもいのちなりけり

本ノママト
云云

『賀茂保憲女集』一六八

かくこひばたへずしぬべしよそにみし人こそおのが命なりけれ

『和泉式部集』九二

つゆをみて草葉のうへとおもひしは時まつ程の命なりけり

『和泉式部集』三〇四

七日、例ならぬこちのみすれば、けふやわがよの、とおぼゆる
いくべくもおもほえぬかなわかれにし人の心ぞいのちなりける

『和泉式部続集』六二六

『賀茂保憲女集』一六八番歌は和歌本文に欠落があるが、「いのちなりけり」の末尾であることは変わらず、当該歌集に二首を確認できる。さらにくだる『和泉式部集』には「いのちなりけり」と、係助詞をともなう「いのちなりけれ」「いのちなりける」の末尾表現を見出せる。『和泉式部集』は「いのち」じたいを詠み込む歌が多く、正集に二十例、続集に二十一例あり、そのうちの三首である。

「いのちなりけり」はまず『古今集』に詠まれ、『古今六帖』にもとられて伝承され、以後は主に私歌集で詠まれていく。特に賀茂保憲女や和泉式部の女性の歌に詠まれていることは注目される。また、「いのちなりけり」は『古今集』には三例あるものの、その後の勅撰和歌集では極めて用例が少ない。ちなみに、八代集それぞれの「いのち」と「いのちなりけり」の和歌数をあげると次のとおりである。

「いのち」を詠む歌数 / 「いのちなりけり」の歌数

(係助詞による変型を含む)

『古今集』	一二 / 三 (うち一例「いのちなりける」)
『後撰集』	一三 / なし
『拾遺集』	二三 / なし
(『拾遺抄』)	一二 / なし
『後拾遺集』	二一 / なし
『金葉集』(二度本)	九 / なし
(同 三奏本)	六 / 一
『詞花集』	四 / なし
『千載集』	二二 / 一 (「いのちなりける」)
『新古今集』	二九 / 一

八代集では、平安時代後期にわずか三例あるのみで、そのうち『金葉集』

三奏本の例は先に挙げた『能宣集』三二番歌であり、あとは『千載集』一一四〇番歌の西住法師詠、『新古今集』一七六八番歌守覚法親王詠を一例ずつ数えるのみである。¹³⁾

「いのちなりけり」は『古今集』によって和歌のひとつの詠みくちとなつたが、一方で、それが決まり切つた和歌表現の定型となるまでには至らない。しかし、平安時代中期の女性歌人たちの歌に散見する表現でもある。

では、こうした和歌の詠みくちは、散文作品にどのように掬いあげられているのか。

「いのちなりけり」を物語和歌に採用した早い例は、『うつほ物語』にある。

夏草に置く露よりもはかなきは君にかかれる命なりけり

『うつほ物語』「菊の宴」

これは、あて宮に贈つた藤英の歌である。『源氏物語』に先駆ける長編物語で、恋の歌として詠まれた一首の末尾である。『うつほ物語』に「いのちなりけり」の用例は、この一例のみである。

みてきたような和歌の表現史ならびに物語和歌の表現をうけて、『源氏物語』の桐壺更衣の一首がある。

桐壺巻では、『古今集』によって浸透する表現でありながら誰にも共有される定型として確立するには至らず、一方で『和泉式部集』には散見

する末尾表現「いのちなりけり」を採用する。

それは、ある程度人口に膾炙した表現による更衣の心情の詠出であり、同時に当世の女性歌人の用いた生き生きとした語感をも呼び込む末尾表現と考えられる。

四、桐壺更衣の絶唱

前掲の「いのちなりけり」を詠み込む和歌をあらためてながめてみると、『古今集』では「あひ見むことは」「はかなきものは」とあり、私家集でも『能宣集』の「しなれぬものは」、『和泉式部集』の「おもひしは」など、「なりけり」の上に「……は」をとまう例が散見する。『うつほ物語』では、間に「君にかかれる」が入るものの、やはり「……は」を受けて「なりけり」と結ばれている。一方で、『安法法師集』『賀茂保憲女集』では「……は」を受けず「いのちなりけり」と結ばれており、「……は いのちなりけり」が定型表現にまで至るわけではない。しかし、平安時代の宮廷社会で最も尊重された勅撰和歌集である『古今集』の「……は いのちなりけり」が嚆矢となり、「……は いのちなりけり」の語調のよさもあつて私家集や『うつほ物語』の和歌が詠まれ、桐壺更衣の「い かまほしきはいのちなりけり」があると考え得る。

『源氏物語』に「いのち」の語は百二十七例あり、「命長く」「命絶へ」「命延ぶ」などの用例が散見するが、「いのちなりけり」は二例のみである。もう一例は、宇治の物語世界にみられる。

長き世を頼めてもなほかなしきはただ明日知らぬ命なりけり

浮舟 一三三頁

これは浮舟のもとに逗留した匂宮の和歌であり、続く浮舟の返歌で「命のみさだめなき世と思はましかば」と受けていく一首である。ここでも、「……は いのちなりけり」のかたちをとっている。

さらに視野を広げれば、散逸物語にも「いのちなりけり」で結ぶ物語和歌が詠まれていたことが知られる。

だいしらず

さりともと思ふ心のなくさめに今も消えせぬ命なりけり

『風葉集』卷第十三 恋三 九六五

ちちにくだくる左大臣

「ちちにくだくる」は鎌倉時代と推定されている散逸物語であり、時代のくだる例になるが、現存しない物語に「……は いのちなりけり」と詠まれる和歌があった可能性もある。もともと、『風葉集』の当該用例は『源氏物語』の前掲二首と『うつほ物語』「ちちにくだくる」の計四首のみ、『物語二百番歌合』には『源氏物語』の二例のみであり、散逸物語の有名な和歌として知られていたものが多くあったとは考えにくいのだが、十世紀後半の『三宝絵』序文に「おほあらしきのもの草よりもしげ

くありそみのはまのまさごよりも」と表されるほど多くの物語が創作されていた事情を思えば、散逸物語の「……は いのちなりけり」という和歌が存在した可能性は否定しきれない。

「……は いのちなりけり」という表現は、語感のよさをともなって詠みやすいひとつの和歌のかたちであったことが考えられる。

『源氏物語』はすでに浸透し語調のよい和歌表現の力を用いて、桐壺更衣の心情を詠出する。しかし、上にくる語句が「いかまほしきは」となる和歌は、物語内にこの一例のみで、たどりみてきた先行文学の用例に確認できず、さらに、『源氏物語』以降にもみられない。更衣の詠歌は、匂宮の詠歌の「かなしきは」と比べても、和歌の語句としてはしっくりせず、浮いている印象がある。上の句と下の句の繋がりは、不自然な感触がぬぐえず、それが掛詞でとりもたれている一首である。前掲の「……は いのちなりけり」のスタイルをとる和歌は、「……ことは」「……ものは」を伴うか、その省略と思われる詠み方である。しかし、更衣の歌は、私が行（生）きたいのは死出の道ではなくて命であったことです、の意であり、補って「いのちの道」くらいに解釈される。生きたいと切実に主張する、その思いの強さが「いのちなりけり」という表現に結実する詠み方である。

桐壺巻の場面では、ある程度馴染んだ表現の型を踏襲し、当世の語感とも見合う末尾表現を用いながら、和歌のことばとしては不自然さをも含む「いかまほしきは」という先行和歌に例をみない独特の語句を上にとりあわせる¹⁵⁾。その表現が、生きることへの更衣の執着を明確に訴えか

けている。

この「いかまほしきはいのちなりけり」は、上の句の「かぎりとして別るる道の」を受け、さらにさかのほれば帝の「限りあらむ道におくれ先立たじ」を受ける。無限ではありえないそれぞれの命を見据えるからこそ、馴染んだ和歌表現と相反する語句の入り交じった下の句が詠み出されるのである。ここで、「限りある道」ではなく、「限りあらん道」と先のことと推量する言い方で発せられたことは、生死の境を迎えて「限りとして」に詠み換えられる。これに直接応じるべき桐壺帝の歌を描かないことが、生に執着する更衣の願望を際立たせている。

人の心情を詠む和歌に「いのち」の語が詠まれ、虚構世界ながら人をつめる物語文学で「いのち」の語は頻出する。「いのちなりけり」という詠嘆をとまなう和歌の末尾表現は、和歌表現史の連続と不連続を含みながら、桐壺更衣独自の心情表現として、物語世界に力強く響くのである。

注

- (1) 新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館) 第六卷所収、鈴木日出男「源氏物語作中和歌一覧」など。
- (2) 「限りあらん道にもおくれ先立たじ、と一叛逆する愛のゆくえ」『国文学』臨時増刊『テキストツアー源氏物語ファイル』学燈社 二〇〇〇年七月。本稿は旧稿からの発展的な問題意識にもとづくため、一部旧稿と重複する部分があることをお断りする。

(3) 『源氏物語』本文の引用と頁数はすべて注1の全集による。

(4) 新日本古典文学大系本(岩波書店)は、次のように本文を校訂する(表記は改めたところがある)。

鞆車の旨旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。限りあらん道にもおくれ先立たじ、と契らせたまひけるを、「さりとともうち捨ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「限りとして別るる道のかなしきにかまほしきは命なりけり
いとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならんを御覧じはてんとおぼしめすに、「けふ始むべき祈りども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまうつ。

- (5) 藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」『源氏物語の始源と現在』三一書房 一九七二年、定本 冬樹社 一九八〇年。
- (6) 注(5) 藤井氏文獻。
- (7) 田中隆昭「光源氏についての予言と宿曜」『源氏物語 引用の研究』勉誠社 一九九九年。
- (8) 新聞一美「桐壺更衣の原像について」『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三年。
- (9) 小町谷照彦「小萩がもと一場面設定と和歌」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、一九八四年。
- (10) 益田勝実「日知りの裔の物語——源氏物語発端の構造——」『火山列島の思想』筑摩書房、一九六八年。
- (11) 藤河家利昭「桐壺巻の方法」『源氏物語の源泉受容の方法』勉誠社 一九九五年。

(12) 和歌本文の引用はすべて新編国歌大観（角川書店）による。

(13) 『千載集』『新古今集』の用例は次のとおりである。

まじろみてさてもやみなばいかげんねざめぞあらぬ命なりける

『千載集』巻第十七 一一四〇 西住法師

ながらへて世にすむかひはなけれどもうきにかへたる命なりけり

『新古今集』巻第十八 雑歌下 一七六八 守覚法親王

(14) 神野藤昭夫『散逸した物語と物語史』若草書房、一九九八年。

(15) 和歌表現として「いかまほしき」が確認できるのは、管見に入ったかぎり

『源氏物語』の桐壺更衣の和歌以外に次の一首のみである。

おなじ人、つくしへくだるに

をしからぬいのちなれどももろともにかまほしきはいきの松ばら

『弁乳母集』一〇七

弁乳母は紫式部の娘大式三位と同時代を生きた人と考えられている。

